この１年をふり返って　～学習会への思い～

学習会専任指導員　　板東　弘和

大学を卒業し２年のあいだ小学校で臨時教員をし、臨時教員３年目の今年度、初めて学習会専任指導員を経験させてもらった。短い期間であったが多くのことを学んだ１年であった。しかし、そもそも私が学習会専任指導員という職に就いたのは、「部落差別解消に対する熱意」からでも「解放教育に対する情熱」からでもなかった。

臨時教員として２年目を迎えた１時期、私は自分自身の教員としての挫折感と家庭内の事情から、教職を去ろうと考えていたときがあった。今、考えてみると教師としてというより、人間として自分はどう生きるべきかということで迷っていたときであり、弱い自分自身を認めたくないがために、自分自身を偽っていたときであったように思う。そんな思いで悶々としていた自分が、もう一度教職を目指そうと考えるようになったのは、そのとき担任していた子どもたちの「やさしさ」に励まされたからにほかならない。もう一度、頑張ってみよう。こんな子どもたちとの出会いを経験したい。板野中学校へ赴任することを決めたのは、そのような思いで決意を新たにしていた時期であった。しかし、そのとき、私の頭の中にあったのは、４ヶ月後に迫った採用試験のことであり、学習会専任指導員を選んだのも、学習会専任指導員なら時間に余裕があり、試験勉強に時間をかけやすいのでないかという思いからであった。

そのときの自分は、解放教育のことも部落問題のことも頭には無く、部落差別の中で、それがあたかも空気のように感じ、身近に部落差別が存在するにもかかわらず、そのことに気付かない自分があった。気付いていても、そのことを心の中でタブーにし、心の奥深く隠してしまっていた。

板野中学校に赴任した当初は、圧倒されることばかりであった。特に、自分の父親の差別意識を生徒の前で明らかにし、なおかつ自分の両親を全体学習の場に連れてきたという吉成先生の話には、絶句させられた。「こんな、教員の世界があるのか。」こんな思いでいっぱいであった。それは、あまりにもまっすぐに生きている教師たちの姿に打たれたからにほかならない。

しかし、同時に私の心の奥には「本当にこの人たちは本物なのだろうか。」という懐疑心が確かにあった。「格好だけでないのか。」「本当に本音で語っているのか。」そういった意識から抜け出せない凝り固まった自分があった。自分の差別意識を見透かされたくない。隠すことで自分を守ろうとするところが、どこかにあったような気がする。

※

５月、学習会が本格的に始まる。14日に第一回全体学習を控えた10日、南会場で１年生と３年生が学習した。私は１年生の社会科を担当していたが、７時30分に学習を終え、学習の最後の方だけ３年生の部落問題学習に参加した。そのとき、私はどのような学習がなされていたのか分からなかったが、あたたかい、つつみ込まれるような雰囲気を感じた。「もう、泣くな。泣くのは今日だけだぞ。」と森口先生の呼び掛けや、授業が終わっても教師を囲んで解けない生徒たちの輪に、「いったいどんな授業だったのだろう。」と興味と疑問を感じていた。次の日、森口先生から10日の部落問題学習のテープ起こしを依頼される。テープの雑音の向こうで、「母の願い」の資料に寄せて、生徒たちが自分の家族の差別意識を語っていく。涙で言葉にならない、とぎれとぎれの子どもたちの魂の叫びであった。この授業は本物だ。この感動を誰かに伝えたい。そん

な気持ちで夢中でワープロのキーをたたいた。

この月は14日、27日と２回、３年生の全体学習があった。初めて参加した全体学習で、私は本音を語り、友だちの意見に必死につながろうとする生徒の姿に感動した。しかし、今、このときの感動は生徒たちに対する同情にすぎなかったのでなかったかと反省している。それは自分自身、まだ部落問題を自分自身の問題としてとらえていなかったし、差別の檻に閉じ込められたままであったからである。それが証拠に、このころは、まだ、全体学習の反省会に出ることに重いものを感じていた。その反面、この反省会に何かを求めていたのであるが……。

※

６月、部落問題を自分自身の問題として、初めて考えるようになってきたのはこの月であったように思う。

14日の町同研「意識の芽生え」の授業を前にして、子どもたちの意識が高まっていた時期であった。郡頭会場のＨが学習会で「先生が部落を知ったのはいつ？」と聞いてきた。Ｈの質問に自分の中学時代の級友の話や、差別があることによって、皆が損をしていることなどを語った。しかし、自分の言葉が空々しく思えたのを今も覚えている。子どもたちにすれば、全体学習を前にして不安な気持ちを、仲間同志でいやしたかったのだろうが、私は部落問題に対する自分の甘さを突きつけられたような気がした。

14日、部落問題学習に積極的で、意識の高い南会場に５会場の３年生が集まって部落問題学習をする。いつもと違う雰囲気で、重たい空気のなか「部落はどこにあると思う。」という森口先生の問いかけに、Ｈが「心の中にあると思います。自分自身の心の中にあると思います。」と応える。それに続いて、子どもたちが自分自身の差別意識を語っていった。生徒の発言を聞きながら、私は自分の家族のこと、友人のこと、そして、自分自身のことを考えた。差別意識につぶされようとする自分、部落差別から目を背け逃げようとする自分、自分自身と部落との関わりを考えた。このときが子どもたちだけでなく、私にとっても意識の芽生えであったよう思う。15日の町同研のときも、私はそんなことばかりを考えていた。その日、家に帰って、初めて自分の母親と全体学習のこと、部落問題のことを話し合った。家庭で部落問題について語れるようになった自分が嬉しかった。

この日から、少しづつではあるが自分の本音を子どもたちにぶつけることができるようになったと思う。

※

自分自身の一番苦しい部分を、他の中学校の仲間（教師集団）に語ることができるようになったのは８月の一泊研修であった。

25日の一泊研修での部落問題学習は、キャンプファイヤーを囲んでおこなわれた。「教師自身が一番厳しいところに立て」とよく森口先生が言っているが、まさにこのときの部落問題学習は、教師と生徒が一緒になって、本音で語り合う部落問題学習であった。自分も心の中をさらけ出したい。そんな気持ちがあったが、どうしてもそうすることのできない自分があった。仲間（教師や生徒）を信頼しきれてなかった部分もあったかもしれないが、何よりも記録に残るということを恐れていたように思う。嘘はつきたくない。どうでもいいようなことは言いたくない。自分の一番辛い部分を言うのでなければ意味がない。でも、どうしても語ることができない。自分が傷つくのは怖くない。しかし、自分が言うことで今まで大切に思ってきた人達が傷つくのが怖い。

そんな思いであった。このような考え方が、今まで部落差別を温存させてきたということに気付きながらも……。

その日の反省会で「大寺会場で語ったことをどうして、あの場で言わなかったんだ。」と阿部先生、私のそんな心を見通かしているかのような言葉であった。あの言葉がなければ、今でも自分は差別の殻に閉じこもったままであったかもしれない。

私にとって自分の一番苦しい部分（本音）を語ることは、嬉しいことであったが、同時に重たいものでもあったことを、今でも昨日のことのように思い出す。

※

11月、大阪で行なわれた全同研に初めて参加する。大阪での３日間は、私にとって喜びと感動の連続であった。今までの価値観が１８０度変わっていく。そんな喜びであった。自分の差別意識がどこにあるのかということが、はっきりと見えてきたのもこのときであった。差別意識がいかに自分の視野をせまくしていたか。

社会認識Ａの会場で特別報告をしていた先生が、「自分は特別なことをした訳でなく、ただ他の人よりも素直に、この場での発言に耳を傾けることができ、それを実行してきただけです。（こんな意味の言葉であったと思う。）」と言われていたが、その言葉が本当にその時の自分に響いた。

※

高校入試、卒業を前にして、３年生の部落問題学習では、高校でも部落問題学習を頑張っていけるのかということが、話題の中心になっていく。生徒の高校への期待と不安、それがひしひしと伝わってきた。それは同時に私自身の期待であり、不安でもあった。４月には板野中学校を離れることが決まっていたのだ。部落問題学習が自分のものになっていない。自分の大切な人達のためにしなければならないものであっても、自分のためにすると正面きって言うことができない。そんな、思いに焦りと不安を感じていた。

３月13日、閉講式を兼ねた一日研修で３年生が後輩への思いを語っていく。

「……一人では歩いていける自信はないけど、周りの雰囲気とかに流されて言えないこともあるかもしれないけど、その人たちにつぶされるような弱い自分では、そこまで弱い自分でないっていう自信はあるから……」「やっぱり、学習会参加すれば、それだけの絆っていうか、仲間の絆がなにか深まって、高校離れたぐらいですぐ離れてしまうような仲間でないって自信もある……」「……くじけそうになったら、真友会に集まって、皆で話し合いましょう。」本当にこの子らは解放されている。そう感じると共に、自分も頑張っていきたいと思った。

※

板野中学校で学んだこと、それは人間らしく生きるということ、「人間は支え合い、励まし合い。尊敬し合うものである。」ということである。人を信じることは自分に素直に生きることであり、自分自身を偽らないことである。そのことが自分自身を解放し、自分自身を高めていく。

そして、人は変わるものであり、変えられるものであるということであった。「変えられる自分から、変わる自分へ」一日研修で森口先生が３年生に言っていた言葉だ。この言葉を胸に刻んで、４月からの新しい人生を歩いていきたい。